

『時空を超えて繋がった絆』

佐川町 佃 哲雄

戦争未亡人の祖母が6年前の9月に永眠し、わが家では実に45年振りの葬儀を済ませた。

翌年の法事で自宅から30キロ離れた故郷のお寺へ住職を車で送り終えたときの事である。早く自宅に戻り、私の帰りを待つ親族たちと一杯やらねばと思っていたとき、ふと寺の駐車場の脇にひっそりと佇む忠霊碑が目にとまった。

何となく誘われるように戦没者の石碑簿の名前を辿ると、『佃』は全部で4名。その中の一人は私の祖父、そしてもう一人は祖父の弟だった。

その事実は祖母や母から何度か聞かされ知ってはいたが、何故かその時

家族を残し故郷を後に国のために命を捧げた祖父たちの思い、子に先立たれた曾祖父母の悲しみ、そして一家の大黒柱を失い、後家となって必死に幼子を育て上げ、姑・姑女を最後まで見届け戦後を生き抜いた祖母の大変な苦勞。

今まで考え及ばなかった様々な思いが私の頭の中を巡り思わず胸が熱くなるのを覚えた。

自分も戦没者の遺族なのだ。慰霊をしっかりと引き継ぎ、英霊に感謝の誠を捧げ、それを子や孫にも語り継がせる責任が自分にはあるのだ。

戦後という時空を超え、また50歳を越えて初めて得た、今思い返してみても何とも言えない不思議な感情だった。

その後は祖母が高齢で参列出来なくなり、10年程途絶えていた故郷の仁淀戦没者慰霊式にも再び遺族とし

て参列させていただくこととなり、昨年は物心多大なお力添えのお蔭をもって、母と共に全国戦没者追悼式への参列を果たし、忘れ難い感動、思い出を得ることが出来た。

また新たな視点で歴史を学ぶ機会も増え、自分の今までの歴史認識に思い込みや偏りがあったことも判った。

今後は受けた御恩に報いる心を忘れず、遺族会の皆さまと共に力を合わせ、英霊の御霊を奉り、再び悲惨な惨禍を繰り返さない一助となるよう微力ではあるが努めて行きたいと思う。

※平成29年10月高知県遺族会報掲載